

平成17年度（第49回）
岩手県教育研究発表会発表資料

特別支援教育

地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の 連携の在り方に関する研究

—相互の特別支援教育コーディネーターの
交流を図るファイルの活用をとおして—

（第2年次）

研究協力校

山田町立豊間根小学校
山田町立荒川小学校
山田町立大沢小学校
山田町立織笠小学校
山田町立船越小学校
山田町立大浦小学校
山田町立山田北小学校
山田町立山田南小学校
山田町立轟木小学校
山田町立豊間根中学校
山田町立山田中学校
岩手県立宮古養護学校

平成18年1月12日
岩手県立総合教育センター
特別支援教育室
佐々木 聖

目 次

I	研究の目的	1
II	研究仮説	1
III	研究の年次計画	1
IV	本年度の研究内容与方法	1
1	研究の目的	1
2	研究の内容与方法	2
3	研究協力校	2
V	昨年度の研究の概要	2
1	地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方	2
(1)	地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方	2
(2)	地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方に関する基本構想図	3
2	特別支援教育コーディネーターの交流の現状と連携にかかわるニーズの調査の概要	4
(1)	調査の目的	4
(2)	調査の結果	4
3	交流を図るファイルの構想	5
(1)	交流を図るファイルの内容	5
(2)	交流を図るファイルの活用	5
VI	本年度の研究結果の分析と考察	5
1	交流を図るファイルの活用に基づく指導実践計画の立案	5
(1)	研究の推進構想	5
(2)	交流を図るファイル（試案）の作成	6
(3)	指導実践計画	8
2	交流を図るファイルの活用に基づく指導実践	9
(1)	指導実践Ⅰ「原案の検討」	9
(2)	指導実践Ⅱ「第1回合同検討会」	9
(3)	指導実践Ⅲ「研究協力校における実践」	10
(4)	指導実践Ⅳ「第2回合同検討会」	12
3	実践結果の分析と考察	14
(1)	原案の検討	14
(2)	第1回合同検討会	14
(3)	研究協力校における実践	15
(4)	第2回合同検討会	15
(5)	調査結果及び分析と考察	15
4	地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についてのまとめ	18
VII	研究のまとめと今後の課題	19
1	研究のまとめ	19
2	今後の課題	20

<おわりに>

【参考文献】

I 研究の目的

今日、小・中学校には特殊学級や通級指導教室のみならず、通常の学級においても特別な教育的配慮を必要とする児童生徒に対する教育的支援の充実のため、小・中学校教員への特別支援教育に関する理解が必要とされている。一方、盲・聾・養護学校に対しては、在籍する児童生徒への教育だけではなく、地域の小・中学校へその専門性を生かした支援等を行うことへの期待が高まっている。これらのことから、小・中学校と盲・聾・養護学校相互の特別支援教育コーディネーターがより積極的な交流を図っていくことが求められている。

しかし、特別支援教育推進体制の整備が始められているものの、それぞれの地域において、特別な教育的配慮を必要とする児童生徒に対し、小・中学校と盲・聾・養護学校が連携を図りながら効果的な支援を行っているとは言い難い現状にある。これは、同じ地域にありながらも、小・中学校と盲・聾・養護学校では、学校種の違いなどから相互の教員の接点が少ないことによる相互の教育的機能の理解の不足が考えられる。特に、相互の窓口となる特別支援教育コーディネーターはそれぞれ模索しながらの取組であり、連携を図るための具体的な取組ができにくい状況であることが考えられる。

このような状況を改善していくためには、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の特別支援教育コーディネーターが教育的機能の理解を深めながら、ニーズに応える連携を図っていくことが重要である。そのためには、相互の特別支援教育コーディネーターの交流の具体的な内容・方法に基づいた取組をしていくことが必要である。

そこで、この研究は、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校相互の特別支援教育コーディネーターが交流を図るために具体的な内容・方法の手だてを示したファイルを作成し、実践をとおして、小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方を明らかにし、特別支援教育の充実に役立てようとするものである。

II 研究仮説

地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携において、相互の特別支援教育コーディネーターが必要な情報を取めた交流を図るファイルを活用し交流すれば、教育的機能の理解が深まり、小・中学校と盲・聾・養護学校との特別な教育的ニーズに応える連携に役立つであろう。

III 研究の年次計画

この研究は、平成16年度から平成17年度にわたる2年次研究である。

第1年次（平成16年度）

地域の小・中学校と盲・聾・養護学校相互の特別支援教育コーディネーターの交流の現状と連携にかかわるニーズの調査、調査結果の分析と考察、小・中学校と盲・聾・養護学校のニーズに応える連携の基本構想の立案と交流を図るファイルの構想

第2年次（平成17年度）

交流を図るファイルを活用した交流の実践、実践結果の分析と考察、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方のまとめ

IV 本年度の研究内容与方法

1 研究の目的

研究協力校において、交流を図るファイルを活用した交流の実践を行い、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方を明らかにする。

2 研究の内容と方法

- (1) 交流を図るファイルの活用に基づく指導実践計画の立案
交流を図るファイルの活用に基づく指導実践の内容を明らかにするとともに、交流を図るファイル（試案）を作成する。
- (2) 交流を図るファイルの活用に基づく指導実践
交流を図るファイル（試案）に基づいて、「山田町版ファイル」を作成し、活用して指導実践を行う。
- (3) 実践結果の分析と考察
「山田町版ファイル」を活用した指導実践の結果と質問紙法により、実践結果の分析と考察を行う。
- (4) 地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についてのまとめ
交流を図るファイル（試案）の活用から、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についてまとめる。

3 研究協力校

山田町立豊間根小学校 山田町立荒川小学校 山田町立大沢小学校 山田町立織笠小学校
山田町立船越小学校 山田町立大浦小学校 山田町立山田北小学校 山田町立山田南小学校
山田町立轟木小学校 山田町立豊間根中学校 山田町立山田中学校 県立宮古養護学校

V 昨年度の研究の概要

1 地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方

- (1) 地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方

近年、小・中学校の通常の学級において、特別な教育的配慮を必要とする児童生徒がいることが明らかとなった。この特別な教育的ニーズへの対応は、学校教職員全体で、さらに外部機関との連携の中で取り組むことが求められている。一方、盲・聾・養護学校においては、地域の特別支援教育のセンター的機能を有する学校として、地域の小・中学校などにおける特別な教育的ニーズへの対応について支援を行うことが求められている。

本県では、平成16年度から、すべての小・中学校において特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーターと表記）が指名され、特別支援教育に関する校内の取組の推進と関係機関との連絡調整などの役割を担うこととなった。同じく、盲・聾・養護学校においてもコーディネーターが指名され、地域内の特別な教育的ニーズのある乳幼児、小・中・高校生及び保護者、担任に対する教育相談窓口などを担うこととなった。

そこで、本研究は、相互の窓口となるコーディネーターが連携を図りながら特別支援教育の充実に努める地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方を明らかにすることとした。

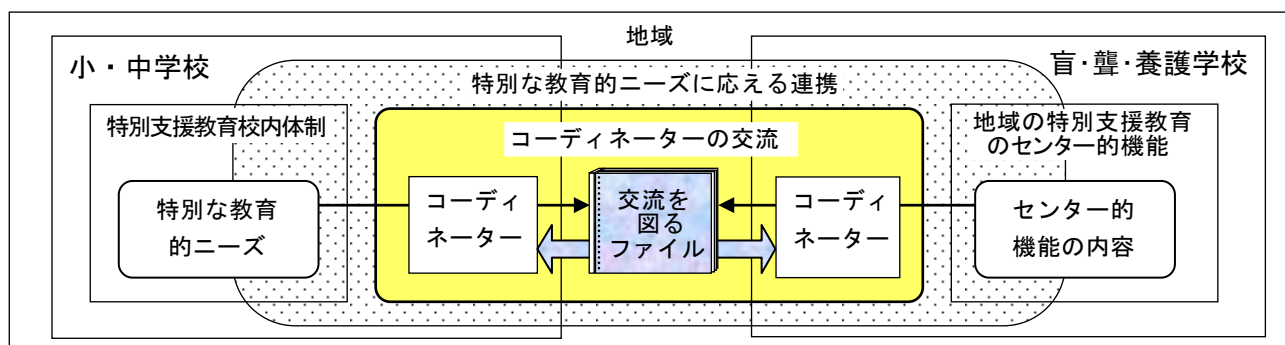
相互の窓口となるコーディネーターが連携を図るためには、学校種の違いなどからくる接点の少なさや、相互の教育的機能の理解の不足が課題となる。そこで、相互のコーディネーターの交流を図る必要があると考えた。コーディネーターの交流は、【表1】で示すとおり「相互を理解する交流」と「連携を進める交流」を図る必要があると考えた。

【表1】コーディネーターが連携を図るための交流

相互を理解する交流	盲・聾・養護学校の地域の特別支援教育のセンター的機能と小・中学校の特別な教育的ニーズの状況について理解を深め、連携の準備を整える交流
連携を進める交流	小・中学校において盲・聾・養護学校との連携が必要と判断した事例や、特別支援教育にかかわるニーズについて連絡・調整し、連携を進める交流

コーディネーターの交流を図るためには、相互の接点となる具体的なものを媒介にする必要

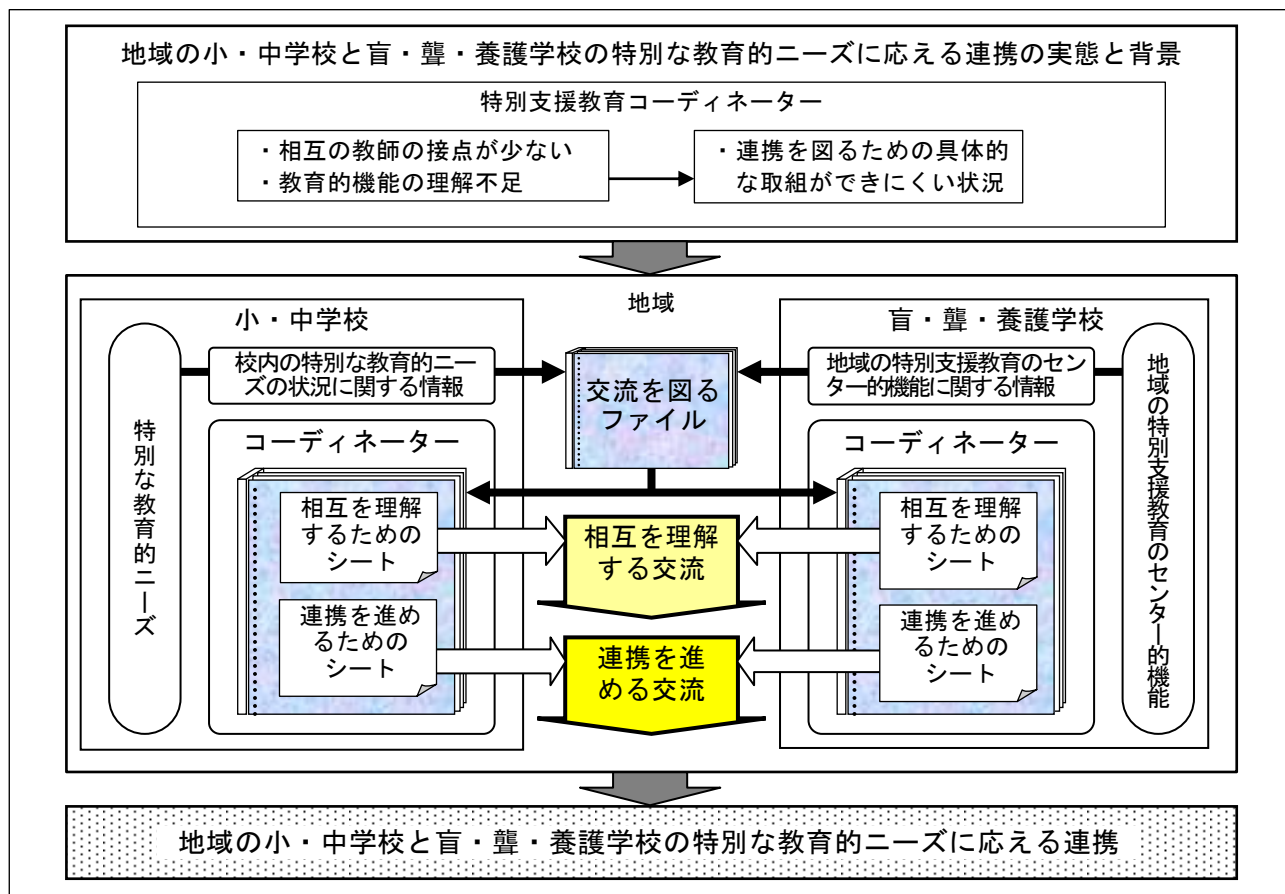
があると考え、ファイルを使うこととし、手だてとしての「交流を図るファイル」を検討した。「交流を図るファイル」には、前頁【表1】から「相互を理解する機能」と「連携を進める機能」、また、交流・連携を記録し、必要な情報を綴じるための「記録する機能」が求められると考えた。そこで、盲・聾・養護学校が主体となって市・町・村単位の地域版「交流を図るファイル」を作成し、地域の小・中学校のコーディネーターとともに活用することとした。このことにより、地域の小・中学校が養護学校の地域の特別支援教育のセンター的機能について理解が深まるとともに、盲・聾・養護学校や地域の小・中学校のコーディネーターとのつながりができるなど、相互のコーディネーターの交流が図られると考えた。そして、小・中学校の特別な教育的ニーズに応える連携が図られると考えた。【図1】は、小・中学校と盲・聾・養護学校の連携とコーディネーターの交流の関係をまとめたものである。



【図1】小・中学校と盲・聾・養護学校の連携とコーディネーターの交流の関係

(2) 地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方に関する基本構想図

基本的な考え方を踏まえ、本研究の基本構想図を作成した。【図2】は、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方に関する基本構想図である。



【図2】地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方に関する基本構想図

2 特別支援教育コーディネーターの交流の現状と連携にかかわるニーズの調査の概要

(1) 調査の目的

研究1年次であった昨年度は、北上教育事務所管内の小中学校27校、中学校11校、県内県立盲学校1校、聾学校2校、養護学校14校、計55校を対象に、小・中学校の特別な教育的ニーズのある児童生徒のための小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の現状と課題、相互のコーディネーターの交流の現状と課題、及び小・中学校の特別な教育的ニーズを明らかにするとともに、小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方等の資料を得るために調査を実施した。

(2) 調査の結果

調査によって明らかになった内容を、小・中学校と盲・聾・養護学校について学校間の連携とコーディネーター間の連携にまとめたものが【表2】である。

【表2】調査の結果

小・中学校	学校間の連携	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・約3割の小・中学校が、特別な教育的ニーズのある児童生徒にかかわり盲・聾・養護学校と連携し、連携は効果的であると評価している ・約8割の小・中学校が盲・聾・養護学校との連携を希望している（希望する主な内容：教育相談、情報提供、研修会、アドバイス、進路相談）
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の盲・聾・養護学校のセンター的機能について理解を深める ・特別な教育的ニーズへの対応を検討し、方向性を見いだす
		考察	<ul style="list-style-type: none"> ・盲・聾・養護学校の具体的なセンター的機能の情報を、地域の小・中学校のコーディネーターに分かりやすく示す必要がある
	コーディネーター間の連携	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な連携内容の情報不足が課題であると回答した学校が5割以上であった ・「コーディネーターが集まり話し合う機会」「各連携内容の手順や進め方」「センター的機能の内容・方法・スタッフの資料」が、特に必要と回答した学校が、6割以上であった
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校のコーディネーターは、盲・聾・養護学校のコーディネーターと具体的な交流を進めるための情報や機会が不足している
		考察	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な「連携内容」を分かりやすく示す必要がある ・センター的機能の内容・方法・スタッフ及び、各連携内容の手順や進め方について示す必要がある ・コーディネーターが集まり話し合う機会の設定を検討する必要がある
盲・聾・養護学校	学校間の連携	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・連携を行う上での校内の課題について、「担当教員の確保」「コーディネーターの研修」「組織体制の改善」と回答した学校が5割以上であった
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・盲・聾・養護学校は、小・中学校との連携に必要な状況が十分に整っていない
		考察	<ul style="list-style-type: none"> ・現在のセンター的機能にかかわる組織体制の中で可能な、具体的な連携内容・方法を示す必要がある
	コーディネーター間の連携	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・交流の際、相互の間で課題となることについて「相手のコーディネーターと面識が無く、よく知らないなどの情報不足」と回答した学校が5割以上、「小・中学校の状況についての情報不足」が約3割であった ・交流を進める際、特に必要と思われることについて、「コーディネーターが集まり話し合う機会」と回答した学校が9割以上、「各連携内容の手順や進め方」「コーディネーターの紹介資料」が5割程度であった
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・盲・聾・養護学校のコーディネーターは、小・中学校のコーディネーターと具体的な交流を進めるための情報や機会が不足している
		考察	<ul style="list-style-type: none"> ・センター的機能の内容・方法・スタッフ及び、各連携内容の手順や進め方について示す必要がある ・小・中学校のコーディネーターの情報と、連携を望む具体的な内容を、可能な範囲で収集し示す必要がある ・コーディネーターが集まり話し合う機会の設定を検討する必要がある

3 交流を図るファイルの構想

(1) 交流を図るファイルの内容

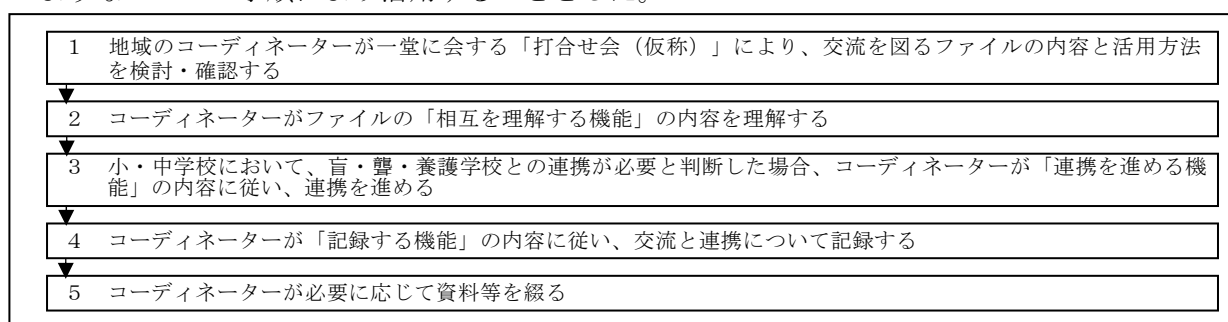
基本的な考え方と調査で明らかになった事柄を踏まえ、交流を図るファイルの内容を「相互を理解する機能」と「連携を進める機能」及び「記録する機能」から【表3】のように整理した。

(2) 交流を図るファイルの活用

基本的な考え方と調査で明らかになった事柄を踏まえ、交流を図るファイルは【図3】のような1～5の手順により活用することとした。

【表3】 交流を図るファイルの内容

<p>1 「相互を理解する機能」の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・センター的機能について、分かりやすく示す内容 ・センター的機能の内容・方法・スタッフなどまとめた資料 ・センター的機能の組織体制、体制の中で可能な連携内容・方法 ・小・中学校のコーディネーターの情報 ・可能な範囲での小・中学校の特別な教育的ニーズの情報
<p>2 「連携を進める機能」の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携の各内容における実際の手順や進め方をまとめた資料 ・具体的な連絡方法や、依頼方法をまとめた資料 ・日程を調整するための年間行事予定表
<p>3 「記録する機能」の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流・連携を記録する記録表 ・必要な資料をファイルする綴り



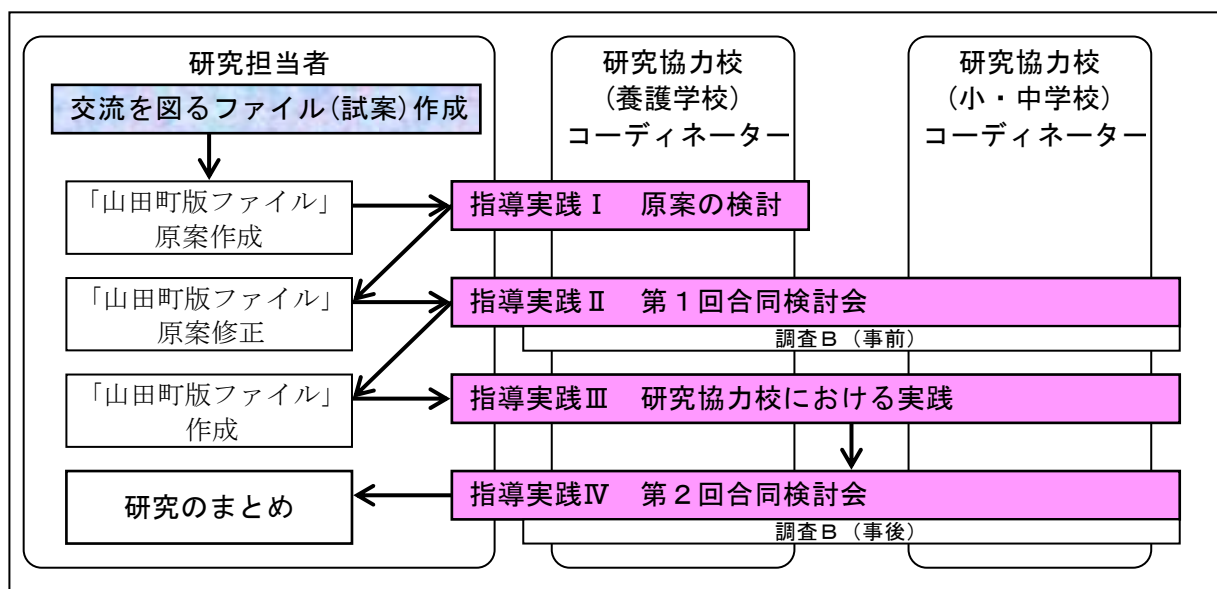
【図3】 交流を図るファイルの活用の手順

VI 本年度の研究結果の分析と考察

1 交流を図るファイルの活用に基づく指導実践計画の立案

(1) 研究の推進構想

研究協力校における指導実践は、「交流を図るファイル（試案）」に基づいて、研究担当者と研究協力校が共同で「山田町版ファイル（地域版）」を作成するとともに、作成した「山田町版ファイル」を活用して研究協力校における実践を行うものである。これを研究の推進構想としてまとめたものが【図4】である。



【図4】 研究の推進構想

(2) 交流を図るファイル（試案）の作成

昨年度の「交流を図るファイルの構想」に基づいて、交流を図るファイル（試案）を作成した。

ア シートの編成

交流を図るファイル（試案）は、見やすさや、分かりやすさを考慮し、同一内容においてシート1枚、あるいは見開き1面で構成した。内容をシート①～⑪として、資料編（シート①～⑧）と様式・記録編（シート⑨～⑪及び綴り）に編成した。各シートの表題、内容及び作成・準備の担当は【表4】に示すとおりである。

【表4】交流を図るファイル（試案）の内容（シートの編成）

編	シート	表題	内容	作成・準備
資料	①	表紙	盲・聾・養護学校のセンター的機能の紹介	盲・聾・養護学校
	②	あいさつ	盲・聾・養護学校のコーディネーターの挨拶	盲・聾・養護学校
	③	連携内容の紹介	盲・聾・養護学校の連携内容の紹介	盲・聾・養護学校
	④	教育相談（例）	各連携内容の具体的内容と進め方	盲・聾・養護学校
	⑤	依頼方法	連携の具体的依頼方法	盲・聾・養護学校
	⑥	市町村内小・中学校	地域の小・中学校のコーディネーター、特別支援教育にかかわるニーズ等の情報	小・中学校
	⑦	年間行事予定表	盲・聾・養護学校の年間行事予定表 (養護学校のファイルには、小・中学校の年間行事予定表を含む)	盲・聾・養護学校 (小・中学校)
	⑧	資料	特別支援教育にかかわる諸資料 (1)教職員全体で子どもを支える校内体制の整備 (2)小・中学校の特別支援教育コーディネーターの役割 (3)盲・聾・養護学校ホームページより（相談・支援センターを抜粋）	盲・聾・養護学校
様式・記録	⑨	連携希望票	連携を依頼するFAX送信票の様式	盲・聾・養護学校
	⑩	交流記録票	コーディネーター間の連絡・調整の記録票	盲・聾・養護学校
	⑪	連携記録票	連携の内容、概要、評価・反省の記録票	盲・聾・養護学校
	綴り	通信つづり 資料つづり	必要に応じ資料等を綴るポケット	

イ 交流を図るファイル（試案）の仕様

交流を図るファイル（試案）の仕様は、以下の5点に留意し、【表5】に示すとおりとした。

- ・コーディネーターが身近な場所に保管し、出し入れが容易なサイズであること
- ・シートが見やすく、必要に応じて取り出してコピーなどすることが容易なこと
- ・コーディネーター間の連絡・調整を記録しやすいこと
- ・記入したシートや通信・資料などを綴りやすいこと
- ・安価であるとともに丈夫であること

【表5】ファイルの仕様

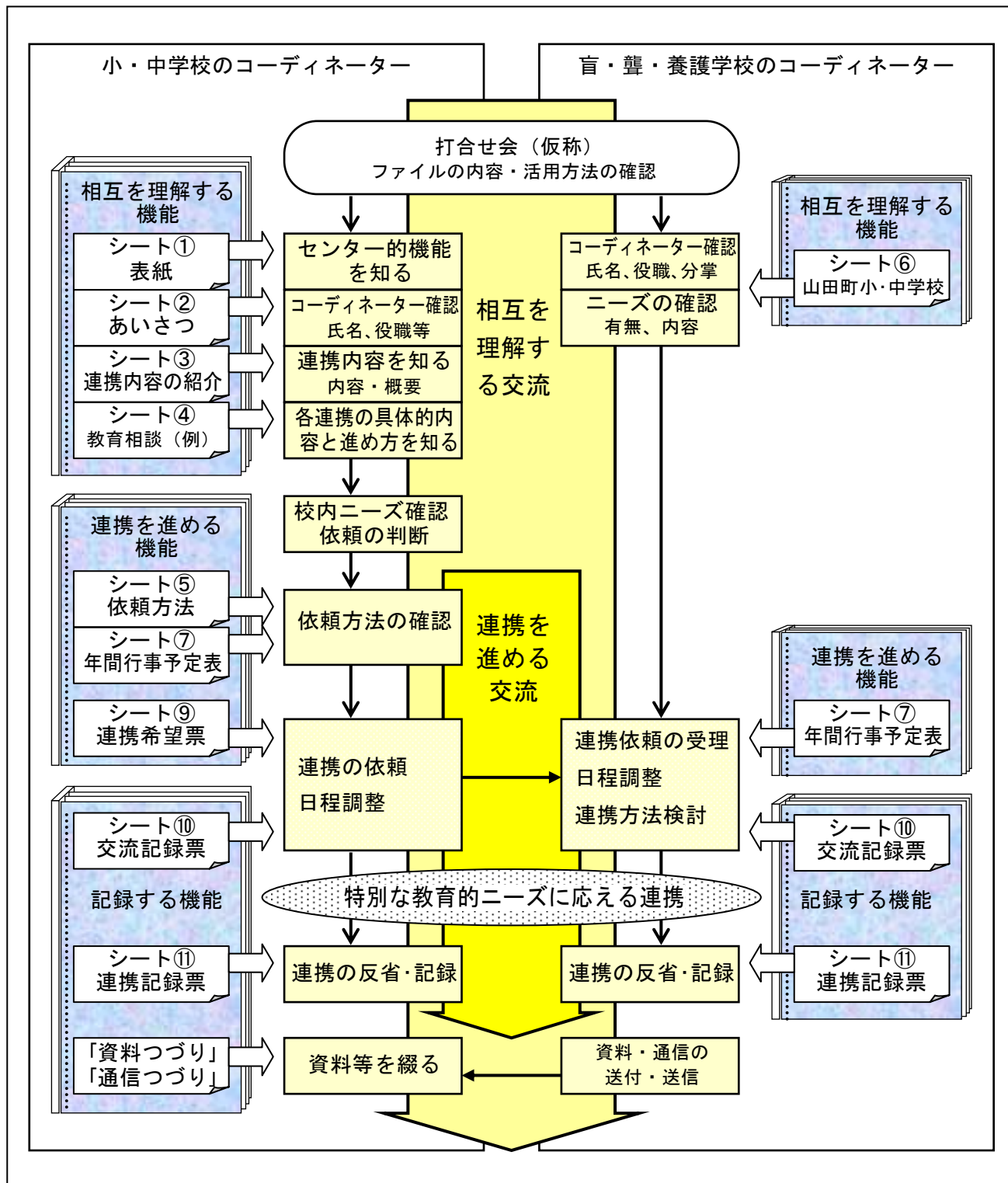
内容	規格	単価	備考
ファイル本体	ルーズリーフフォルダ A4サイズ	105円	
シートポケット	30穴 透明ポケット A4サイズ	105円 (20シート)	
ルーズリーフ用紙	30穴 無地 A4サイズ	105円 (30枚)	シート⑩に使用

ウ 交流を図るファイル（試案）の具体的な活用の流れ

打合せ会（仮称）は、年度当初に開催し、地域のコーディネーターが顔を合わせるとともに、ファイルの内容や活用方法の確認を行うものであり、「相互を理解する交流」に位置付けた。

シート①～⑪及び「資料つづり」「通信つづり」は、それぞれ「相互を理解する交流」「連携を進める交流」「交流・連携等の記録」の場面で活用する。

具体的な活用の流れを【図5】に示した。



【図5】 交流を図るファイル（試案）の活用の流れ

(3) 指導実践計画

ア 指導実践のねらい

指導実践は、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校のコーディネーターが、交流を図るための手だてとして「交流を図るファイル（試案）」を活用することが有効であるかどうかを検証することが目的である。

本研究で行う指導実践は、指導実践Ⅰ「原案の検討」、指導実践Ⅱ「第1回合同検討会」、指導実践Ⅲ「研究協力校における実践」、指導実践Ⅳ「第2回合同検討会」である。指導実践Ⅰ～Ⅳのねらいは、【表6】に示すとおりである。

【表6】各指導実践のねらい

指導実践Ⅰ 原案の検討
「交流を図るファイル（試案）」に基づいて研究担当者が作成した「山田町版ファイル」原案について、現在の宮古養護学校の地域の特別支援教育のセンター的機能とその取組から検討する。
指導実践Ⅱ 第1回合同検討会
本研究の趣旨を理解し、研究協力校における指導実践の内容を確認するとともに、指導実践で使用する「山田町版ファイル」の内容と活用方法を検討する。
指導実践Ⅲ 研究協力校における実践
「山田町版ファイル」に基づく指導実践をとおして、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校のコーディネーターが、交流を図るための手だてとして「交流を図るファイル（試案）」を活用することが有効であるかどうかを検証する。
指導実践Ⅳ 第2回合同検討会
指導実践の結果を確認し、「交流を図るファイル（試案）」を再検討するとともに、本研究に係る意見を交換し、研究のまとめに資する。

イ 各指導実践の概要

原案の検討と第1回合同検討会は、「山田町版ファイル」を作成する取組である。また、合同検討会は、地域のコーディネーターが一堂に会する「打合せ会（仮称）」の実践としても位置付ける。研究協力校における実践は、作成した「山田町版ファイル」を実際に活用した取組である。

各指導実践の概要は、【表7】に示すとおりである。

【表7】各指導実践の概要

内容	日程	場所	参加者等
指導原案 実践の Ⅰ検討	第1回原案検討会	平成17年5月26日	県立宮古養護学校 宮古養護学校教頭、コーディネーター 研究担当室長、研究担当者
	第2回原案検討会	平成17年6月2日	総合教育センター 宮古養護学校コーディネーター 研究担当者
	最終原案検討	平成17年6月3日 ～6月26日	県立宮古養護学校 宮古養護学校コーディネーター
指導実践Ⅱ 第1回合同検討会	平成17年7月29日	県立宮古養護学校	研究協力校コーディネーター 研究担当者
指導実践Ⅲ 研究協力校における実践	平成17年8月(夏季 休業後)～9月末日	研究協力校	研究協力校コーディネーター
指導実践Ⅳ 第2回合同検討会	平成17年10月7日	山田町立山田中学校	研究協力校コーディネーター 研究担当者

2 交流を図るファイルの活用に基づく指導実践

(1) 指導実践Ⅰ「原案の検討」

「交流を図るファイル（試案）」を具体的に活用するためには、実際の地域の盲・聾・養護学校と小・中学校の情報による「山田町版ファイル」に再構成する必要がある。そのため、研究担当者が「交流を図るファイル（試案）」に基づいて、「山田町版ファイル」原案を作成した。この原案をベースにして、宮古養護学校のコーディネーターと「山田町版ファイル」の検討を行った。

ア 第1回原案検討会

第1回原案検討会の主な内容は以下のとおりである。

- ・研究趣旨の説明
- ・「山田町版ファイル」原案の説明及び協議

成果として、本研究についての理解を得ることができた。また、通信の取組に関して、プライバシーや担当者の負担などの理由から検討課題となった。

イ 第2回原案検討会

第2回原案検討会の主な内容は以下のとおりである。

- ・研究内容に関する協議
- ・「山田町版ファイル」原案に関する協議

成果として、研究内容に関する協議では、山田町内の小・中学校との連携の現状及び宮古養護学校の校内体制と相談・支援部の現状について確認し、指導実践を進めるために必要な情報を得ることができた。「山田町版ファイル」原案に関する協議では、資料編と「連携希望票」及び「交流記録票」について内容と活用の仕方を検討することができた。また、第1回合同検討会に向けた検討推進の日程を確認した。

ウ 最終原案検討

最終原案検討では、宮古養護学校において「山田町版ファイル」原案の校正を行った。この校正原稿に従い、研究担当者が「山田町版ファイル」原案を修正することができた。

(2) 指導実践Ⅱ「第1回合同検討会」

当日の参加者は、研究協力校コーディネーター12名中10名（そのうち代理出席2名）であった。会の冒頭では、本研究の背景となる特別支援教育の近年の動向と現在の本県における施策について説明した。次に、本研究の概要を説明するとともに「山田町版ファイル」原案を提案して、その内容と活用の仕方について説明し、協議を行った。

協議で出された主な意見は【表8】のとおりである。

【表8】協議で出された主な意見

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・「山田町版ファイル」原案の内容は、宮古養護学校の地域支援の内容が分かるとともに、連携の進め方が分かりやすく示されていてよい・「連携希望票」は、小・中学校から希望がある場合使用することでよい・年に1、2度、定期的に地域の各学校のコーディネーターが交流・顔合わせをする機会があるとよい・今回の研究の実践が、成果として宮古養護学校に継続して位置付くことが、他の市町村にとって取組のモデルとなり、県としての盲・聾・養護学校の地域支援の方法としてこのファイルシステムが位置付くことになると考える・継続していくためには、ファイル内容の更新が必要であるし、予算配置も必要である・情報の利用という観点から、共通に使えるものなら Web 上にあると便利である |
|--|

以上のことを受けて、「山田町版ファイル」原案の内容について、修正を加えながら「山田町版ファイル」を作成し、活用することとした。

(3) 指導実践Ⅲ「研究協力校における実践」

ア 研究協力校における実践の内容

研究協力校のコーディネーターが、指導実践期間に各校で取り組んだ内容は【表9】のとおりである。

【表9】研究協力校における実践の内容

- ・「山田町版ファイル」の内容（宮古養護学校の地域支援の内容と方法、小・中学校の特別な教育的ニーズの状況）について把握する
- ・各学校の特別支援教育にかかわるニーズに応じて、必要な場合、シート⑨「連携希望票」により依頼するとともに、連絡の概要をシート⑩「交流記録票」に記録する
- ・連携を行った場合、シート⑪「連携記録票」に記録する
- ・連携により得た資料等がある場合はファイルに綴じる

イ 「山田町版ファイル」の実際

「山田町版ファイル」の各シートについて、以下の点に留意して構成した。

【図6】に示すシート①

「表紙」では、山田町内小・中学校名を表示するとともに、宮古養護学校のセンター的機能の取組について、その概要を紹介した。

シート②「あいさつ」では、コーディネーターの自己紹介と、支援部の今年度の活動方針について簡潔に示した。

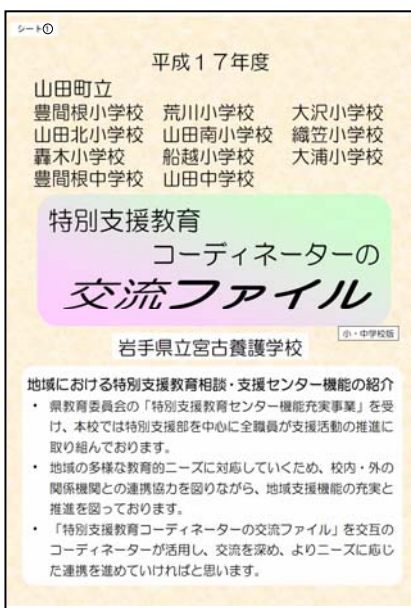
【図7】に示すシート③「1 連携内容の紹介」では、今年度、宮古養護学校が実施するセンター的機能から、小・中学校を対象とした3つの連携内容について簡潔に示した。

シート④-1～3は、シート③の3つの連携内容を具体的に示したものである。

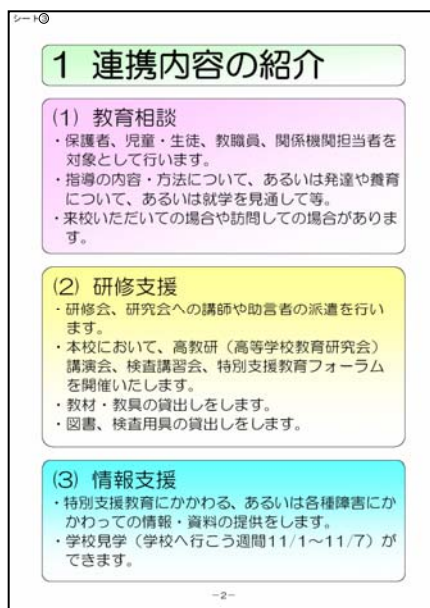
【図8】に示すシート④-1「(1) 教育相談」では、対象者と相談内容、教育相談システム及び具体的な進め方について簡潔に示した。以下④-2「(2) 研修支援」、④-3「(3) 情報支援」も同様に構成した。

次頁【図9】に示すシート⑤「2 依頼方法」では、具体的な連絡方法について、連絡先、対応者、受付時間を示すとともに、宮古養護学校の地図及び交通手段について示した。

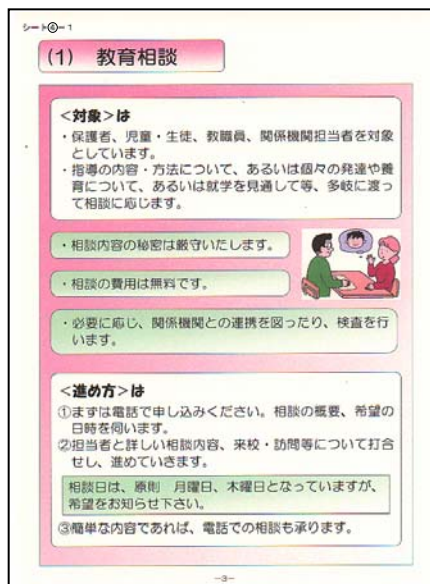
シート⑥「3 山田町内小・中学校」は、山田町内の小・中学校の基本情報（校名、校長氏名、児童・生徒数、学級数、



【図6】シート①「表紙」



【図7】シート③「1 連携内容の紹介」



【図8】シート④-1 「(1) 教育相談」

特殊学級等の設置状況、住所、連絡先)に加え、コーディネーターの情報(職、氏名、担当)及び、連携希望がある場合、その具体的内容を表により示した。

シート⑦「年間行事予定表」は、宮古養護学校の年間行事予定表をシートとした。宮古養護学校が所持するファイルには、山田町内小・中学校の年間行事予定表を加えた。

シート⑧-1～3は、特別支援教育にかかわる諸資料である。

【図10】に示すシート⑧-1「5資料(1)」は、校内支援体制の整備、シート⑧-2「5資料(2)」は、コーディネーターの役割についての基礎的内容、シート⑧-3「5資料(3)」は、宮古養護学校Webページ相談・支援センターの内容とした。

【図11】に示すシート⑨「連携希望票」は、FAX送信票の様式であり、小・中学校が連携の依頼に使用する。簡単な説明とファックスナンバー等を示すとともに、連携希望内容とその概要を記述する欄等を設けた。

【図12】に示すシート⑩「交流記録票」は、コーディネーター間の連絡・調整の記録票として、月日、件名、備考等の欄を設けた。養護学校用では、校名の記入欄を加えた。ルーズリーフ用紙に印刷することにより、記入のしやすさに配慮した。

【図13】に示すシート⑪「連携記録票」は、連携の記録票として、日時、場所、連携内容、概要と評価・反省、その他の欄を設けた。

【図9】シート⑤「2 依頼方法」

【図10】シート⑧-1「5資料(1)」

【図11】シート⑨「連携希望票」

【図12】シート⑩「交流記録票」

【図13】シート⑪「連携記録票」

ウ 研究協力校における実践の結果

研究協力校において、8月（夏季休業後）から9月に実施した実践の結果として、宮古養護学校との連携を行った学校は11校中4校であった。また、校内での活用は1校であった。【表10】は、研究協力校における実践の結果をまとめたものである。

【表10】 研究協力校における実践の結果

宮古養護学校との連携の実践（4校）	
A校	・校内研修会の講師を依頼した（1件）
B校	・課題をもつ子どもの指導について、宮古養護学校に訪問指導を依頼し、アドバイスを 得た（1回）
C校	・連携希望票により教育相談を依頼し、アドバイスを得た（2事例） ・宮古養護学校主催の講演会に参加し研修した（3回） ・検査器具を借用した（1回）
D校	・連絡をとり検査器具を借用した（1回）
校内での活用の実践（1校）	
E校	・「山田町版ファイル」について職員会議で報告し、全職員の理解と意思統一を図った （1回）

(4) 指導実践Ⅳ「第2回合同検討会」

当日の参加者は、研究協力校コーディネーター12名中4名が欠席して8名であった。欠席者の実践結果と意見・感想について、3名は、研究担当者が研究協力校に出向いての聴き取り、1名は、メールによる記述により確認した。

会の冒頭では、本検討会の趣旨を説明し、各校の実践の結果を確認するとともに協議を行った。

【表11】は、協議の記録から「山田町版ファイル」を活用した指導実践の効果について意見と感想をまとめたものである。

【表11】 「山田町版ファイル」を活用した指導実践の効果（協議記録から）

<p>○養護学校の地域の特別支援教育のセンター的機能について理解が深まったか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の指導実践により、特別支援の理解を深めることができた ・研修により特別支援について頭では分かっていたが、ファイルにより具体的なものとして分かった ・ファイルにより、宮古養護学校に具体的に相談できることが分かる、コーディネーターの支えになる ・ファイルにより、自分自身コーディネーターとしての役割について理解が深まった ・宮古養護学校が身近なものとして感じるということができたという意味で効果があった ・このファイルが宮古養護学校との連携の糸口になると思う ・ファイルにより、特別な支援が必要な子どもの相談の窓口の選択肢として宮古養護学校があることが具体的に分かり「何かあったときは」と思えた
<p>○宮古養護学校や地域の小・中学校のコーディネーターとのつながりや連携が図られたか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ファイルを十分に活用し、宮古養護学校との連携の取り始めができた ・二つの事例について、連携希望票により連絡をとり、教育相談を受けたり検査器具の借用、講演会の参加と連携に活用できた
<p>○宮古養護学校における指導実践の効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「連携希望票」による依頼システムは、連絡のすれ違いがなくなり有効であった
<p>○その他の効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ファイルにより刺激を受け、コーディネーターとしての役割について研修を進めた ・研修会でコーディネーターの役割を学び、その上でファイルがあることで効果がある ・昨年、ADHDの子どもの担当していたときにこういうファイルがあれば良かったと思う

【表12】は、協議の記録から、「山田町版ファイル」の今後の活用について意見と感想をまとめたものである。

【表12】「山田町版ファイル」の今後の活用についての意見と感想（協議記録から）

<p>○山田町小・中学校から挙げられた意見と感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後連携の機会は増えると思う、研究は外れても行っていければ良い ・現場で特別支援の対応が求められれば必要となる、該当児童がいれば活用したい ・今後、職員の研修の機会があると思う、その時、宮古養護学校からの講師派遣が考えられる ・記録票があるので、毎年積み重ねていくことができる ・年度途中からであったが、年度当初からあれば良かった
<p>○宮古養護学校から挙げられた意見と感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度のファイルをベースにして、変更事項を差し替えて使うことができる ・ファイルは本校と町内小・中学校とのものだが、小学校と中学校との引継ぎ等連携に使えると思う

【表13】は、協議の記録から、「山田町版ファイル」の改善についての意見をまとめたものである。

【表13】「山田町版ファイル」の改善についての意見（協議記録から）

<p>○シート①「表紙」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度で更新せずに、継続して使っていくことが良い、研修会の日程など具体的な数字は年間行事予定表やWebページを見れば分かる
<p>○シート⑥「山田小・中学校」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宮古養護学校：見やすいものであり、あれば良いと思うが、依頼が来たものを受ける立場である ・小・中学校：必要である－3校（コーディネーターがだれなのか知りたい）、特に必要ない－4校
<p>○シート⑦「年間行事予定表」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校の「年間行事予定表」を見る余裕はなかった ・養護学校の予定は必要である、養護学校の予定を見て連絡をとった
<p>○シート⑧「資料」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料は簡単なものであればほしい ・子どもの判断をどのようにすれば良いかという内容がほしい ・教材・検査用具の貸出しについて、一覧表があると活用しやすい ・他機関の情報・連絡先などの資料がほしい ・「資料」を充実したほうが良い

【表14】は、その他の意見をまとめたものである。

【表14】その他の意見

<p>○会議の設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援の対象となる子どもを抱えていれば話合いの機会がほしい ・身近な場所（町内）での会議であれば良いが、遠く（宮古）に出向くのは負担となる
<p>○その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様式の統一ができた点が良い、連携の組織作り、機会も含めて進めていくことが必要 ・小学校では、1年生について6月頃に気付きがある、その時期に連携できるシステムであると良い ・学校現場では100%ニーズがあり、この子はこういった指導が良いのかアドバイスがほしい ・宮古養護学校は、学校内の職務があり、その範ちゅうで外へも動くのであろう ・行政の動きが期待される ・小・中学校のコーディネーター同士の連携は（個人的内容のため）必要を感じない

3 実践結果の分析と考察

(1) 原案の検討

原案の検討を進めるに当たっては、交流を図るファイル（試案）に基づいて研究担当者が作成した「山田町版ファイル」原案を活用して、宮古養護学校のコーディネーターと研究担当者が具体的な検討を進めた。検討の手順は、①シートの編成、②様式・記録編シートの活用方法、③各シート内容の構成、④原稿の作成、であった。これにより、「山田町版ファイル」原案の、宮古養護学校にかかわる内容と活用の仕方について検討することができた。また、山田町内小・中学校にかかわる内容については、研究担当者が、学校名、コーディネーターの職・氏名・校務担当、宮古養護学校との連携希望の具体的内容についての調査Aを実施して情報を収集し、シート⑥「山田町内小・中学校」を作成した。

以上、前述のとおり原案の検討をとおして、「山田町版ファイル」原案を修正した。このことは、盲・聾・養護学校が地域版ファイルを作成するためには、シート⑥「市町村内小・中学校」を盛り込んで作成することが、コーディネーターの連携を図っていく上で最低限必要であるということである。

また、盲・聾・養護学校が調査を実施する場合、小・中学校や市町村教育委員会と連携して行うことが考えられる。

(2) 第1回合同検討会

ア コーディネーター間の情報交換

第1回合同検討会は、山田町小・中学校のコーディネーターと宮古養護学校のコーディネーターが始めて一堂に会する機会となった。その結果、協議では「町内では連携の例があるのか」「どのような事例を相談しているのか」など、他校の取組の様子についての質問が出された。また、年に1、2回定期的に地域のコーディネーターが顔を合わせる機会を望む意見が多く出された。これは、コーディネーターの指名が始められて間もないために、過去の取組の蓄積がなくどのように取り組めばよいのか分からない状況が少なくないことと、普段、コーディネーター同士が交流する機会が少なく、他校との情報交換が行われていないためと考える。

イ 地域のコーディネーターが一堂に会する「打合せ会（仮称）」

第1回合同検討会は、宮古養護学校を会場に開催した。その結果、「養護学校に初めて来る機会となった」「これまではどこにあるのか分からなかった」などの声があった。これは、普段、養護学校とかかわる機会がないためであり、コーディネーターの交流を進める場合、地域の養護学校を会場にした会議を設定することは、お互いを知る機会になると考える。一方、会議のために時間をかけて移動をすることを望まないという声も聞かれた。地域のコーディネーターが一堂に会する「打合せ会（仮称）」については、養護学校での開催によるメリットと、デメリットを考え合わせ、会場を設定する必要があると考える。また、今回の会を設定するにあたって、開催日程を調整することは容易ではなかった。その結果、何名かの欠席や代理出席、また、学校の業務を調整しての出席があった。これは、学校行事予定が決まった中で、町内すべての小・中学校のコーディネーターの日程調整を進めることは困難なためと考える。また、旅費等の課題もある。そこで、市町村教育研究会など、既存の市町村単位の行事の中に設定したり、教育委員会と連携しての開催が考えられる。

(3) 研究協力校における実践

研究協力校における指導実践では、「山田町版ファイル」を活用した。また、実践に当たっては、あくまでも各校において連携する必要がある場合に進めるように依頼した。その結果、小・中学校11校中4校が宮古養護学校との連携を行った。うち2校は、今回初めての連携であった。これは、「山田町版ファイル」の活用により、宮古養護学校の地域のセンター的役割について理解が図られ、ファイルの活用によって連携が進められたためと考える。養護学校と小・中学校の連携は、小・中学校において必要と判断した場合進めるものであることから、指導実践期間の中で11校中4校の連携があったことは、「山田町版ファイル」の活用は、相互のコーディネーターの交流を進めるために効果的であったと考える。

(4) 第2回合同検討会

第2回合同検討会の協議では、小・中学校のコーディネーターから、「山田町版ファイル」を活用した指導実践の効果について、センター的機能の理解が深まったという感想が多く出された。校内研修会の講師依頼について連携したA校からは、「学校現場では地域の養護学校へのニーズがある」「この子どもはどういった指導が良いのか学校の希望に添ったアドバイスがほしい」「今後連携の機会は増えると思う」との感想が出された。今回は連携に至らなかった学校のコーディネーターからは、「今回の指導実践で、特別支援教育の理解を深めることができた」「ファイルによりコーディネーターとしての役割について理解が深まった」「宮古養護学校が身近に感じられた」「ファイルはコーディネーターの支えになる」など多くの感想を得た。これは、「山田町版ファイル」の活用により、宮古養護学校の地域のセンター的役割と、連携の進め方について具体的に理解が図られたためと考える。

また、今後も継続してファイルの活用を望む感想が多く出され、継続していくための具体的な意見も出された。これは、「山田町版ファイル」がコーディネーターにとって、有効なものとしてとらえられたためと考える。

(5) 調査結果及び分析と考察

ア 調査対象

- ・研究協力校（小・中学校）のコーディネーター11名
- ・研究協力校（養護学校）のコーディネーター4名

イ 調査の内容と方法

(ア) 調査の内容

調査の内容は【表15】のとおりである。

【表15】 調査の内容

<小・中学校>	<養護学校>
I 宮古養護学校のコーディネーターとの交流について	問1 山田町内の小・中学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題
問1 交流を進める際の課題	問2 交流を進める際の校内における課題
問2 交流を進める上で必要と思われること	問3 交流を進めていく上で必要と思われること
II コーディネーターとしての役割について	問4 連携についての意見（自由記述）
問3 役割の理解	
問4 情報源	
問5 コーディネーターとしての取組	
問6 校内の特別な教育的支援を必要とする児童生徒についての把握	
III 地域のセンター的役割について	
問7 センター的役割の理解	
問8 情報源	
問9 宮古養護学校との連携の経験	
問10 連携の内容、回数	
問11 宮古養護学校コーディネーターとの交流経験	
問12 交流の内容、回数	
問13 連携についての意見（自由記述）	

(イ) 調査の方法

調査は同一内容で指導実践の前後の2回実施した。調査紙は、合同検討会の際に回収した。
 なお、回答率は100%であった。

① 事前

- ・調査期間：平成17年7月19日～28日
- ・回 収：平成17年7月29日（第1回合同検討会）

② 事後

- ・調査期間：平成17年10月3日～6日
- ・回 収：平成17年10月6日（第2回合同検討会）

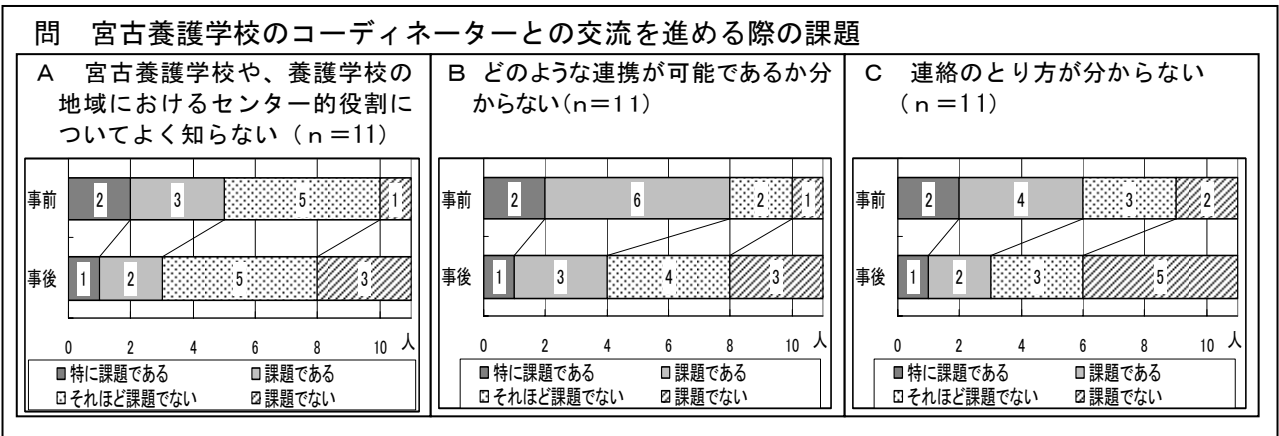
(ウ) 調査結果及び分析と考察

① 小・中学校

以下に、小・中学校における調査結果について特徴的な傾向が見られた4項目について、分析と考察を述べる。

○ 宮古養護学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題

【図14】は、宮古養護学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題についての意識の変容を示したものである。



【図14】 宮古養護学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題についての意識の変容

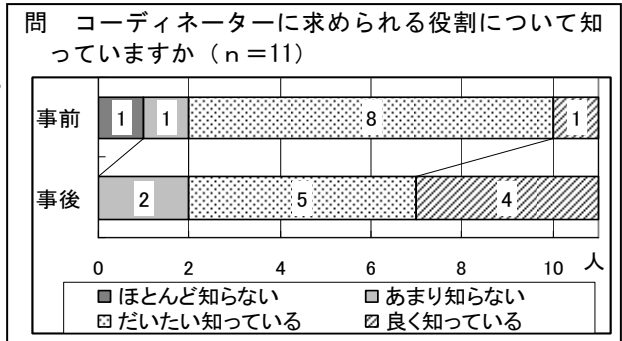
【図14】 Aから、「宮古養護学校や、養護学校の地域におけるセンター的役割についてよく知らない」という課題が軽減したと言える。【図14】 Bから、「どのような連携が可能であるか分からない」という課題が軽減したと言える。これらは、ファイルのシート①「表紙」のセンター機能の紹介、シート③「連携内容の紹介」の教育相談等の概要の説明、シート④-1「教育相談」2「研修支援」3「情報支援」の具体的な内容と進め方の説明、シート⑧-3「(3)宮古養護学校ホームページより」の相談・支援センターの紹介や活動状況の報告により、地域におけるセンター的役割と連携内容についての理解が深まったためと考える。

【図14】 Cから、「連絡のとり方が分からない」という課題が軽減したと言える。これは、シート④-1「教育相談」2「研修支援」3「情報支援」の具体的な進め方の説明、シート⑤「依頼方法」の連絡の仕方の説明により、連絡のとり方が理解できたためと考える。

これらのことから、小・中学校のコーディネーターにおいては、ファイルのシート①、③、④、⑤、⑧の相互を理解する機能と連携を進める機能により、宮古養護学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題が軽減したととらえる。

○ コーディネーターに求められる役割の理解の状況

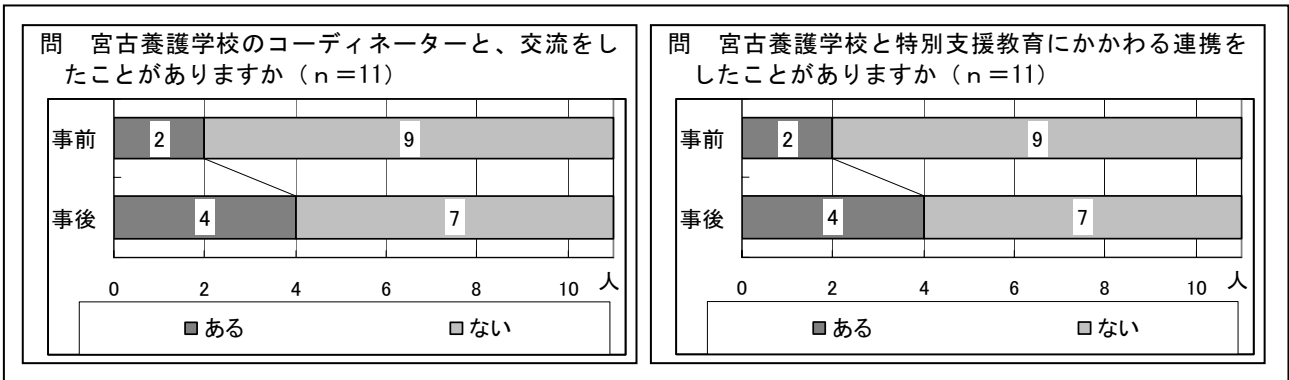
【図15】は、コーディネーターに求められる役割についての理解の変容を示したものである。「良く知っている」の回答が3名増加し、「ほとんど知らない」の回答が1名から0名に減少している。このことは、ファイルのシート⑧-2「(2) 小・中学校の特別支援教育コーディネーターの役割」の内容から、コーディネーターの役割についての理解が深まったためと考える。



【図15】 コーディネーターに求められる役割についての理解の変容

○ 交流と連携の状況の変容

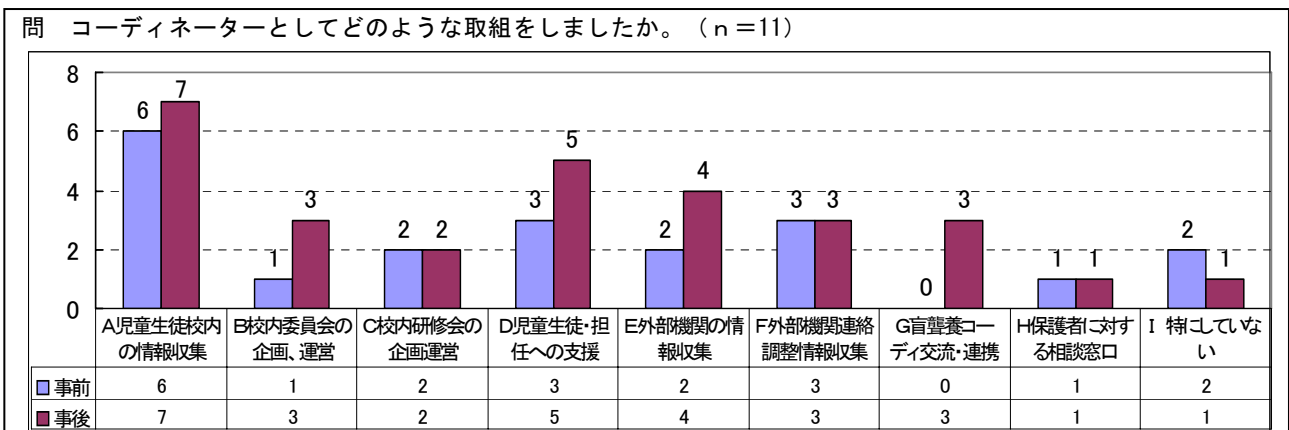
【図16】は、宮古養護学校のコーディネーターとの交流及び宮古養護学校との特別支援教育にかかわる連携の状況の変容を示したものである。交流、連携ともに、「したことがある」との回答が、2名から4名に増加している。交流・連携をしたことがない学校の中で、ニーズがある学校が2校あり、ファイルを活用することによって宮古養護学校と連絡をとり、連携を進めることができたことから、ファイルが有効に機能したことを示すものととらえる。



【図16】 交流と連携の状況の変容

○ コーディネーターとしての取組状況の変容

【図17】はコーディネーターとしての取組状況の変容を示したものである。「特にしていない」の回答が2名から1名に減少し、「養護学校のコーディネーターとの交流・連携」の回答が0名から3名と最も増加している。また、他の4つの取組においても増加が見られる。このことは、ファイルを活用した指導実践により、養護学校のコーディネーターとの交流・連携が行われるとともに、校内の取組においても効果があったことが考えられる。



【図17】 コーディネーターとしての取組の状況の変容

② 養護学校

以下に、養護学校において調査結果について特徴的な傾向が見られた項目について、分析と考察を述べる。

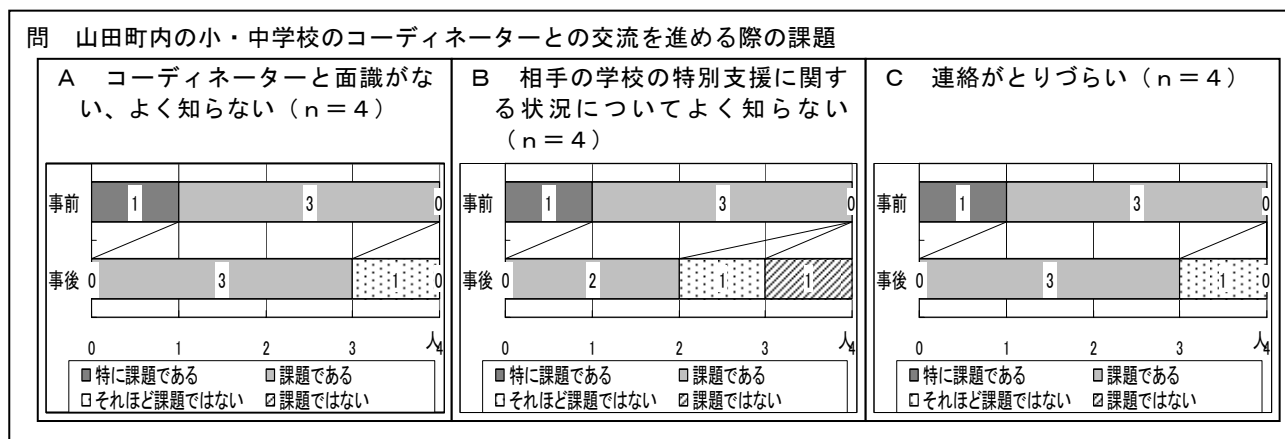
○ 山田町内小・中学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題

【図18】は、山田町内の小・中学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題についての意識の変容を示したものである。

【図18】Aから、「コーディネーターと面識がない、よく知らない」という課題が軽減したと言える。また、【図18】Bから、「相手の学校の特別支援に関する状況についてよく知らない」という課題が軽減したと言える。これらは、ファイルのシート⑥「山田町内小・中学校」の小・中学校のコーディネーターとニーズの情報により理解が深まったと考えられる。

【図18】Cから、「連絡がとりづらい」という課題が軽減したと言える。これは、「連携希望票による依頼システムは、連絡のすれ違いがなくなり有効であった」との感想からも、シート⑨「連携希望票」をFAX送信の様式として設定し、依頼するシステムを明確にしたことによるものと考えられる。

これらのことから、宮古養護学校においてファイルのシート⑥、⑨が有効に機能し、小・中学校のコーディネーターとの交流を進める際の課題が軽減したととらえる。



【図18】 山田町内の小・中学校コーディネーターとの交流を進める際の課題

4 地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についてのまとめ

交流を図るファイル（試案）の活用に基づく指導実践を行い、実践結果の分析と考察をとおして明らかになったのは、以下のとおりである。

- (1) 交流を図るファイル（試案）の内容について「相互を理解する機能」と「連携を進める機能」及び「記録する機能」から整理し、①～⑪のシートとして資料編と様式・記録編に編成することにより、相互を理解し、連携を進めるコーディネーターの交流を図るファイルを作成することができた。
- (2) 宮古養護学校のコーディネーターと「山田町版ファイル」原案を検討することにより、盲・聾・養護学校が地域版のファイルを作成するために必要な事項を整理することができた。
- (3) 地域のコーディネーターが一堂に会する「打合せ会」に位置づく「合同検討会」を行うことにより、地域のコーディネーター同士が交流する機会となった。今後は、日程調整の工夫や教育委員会と連携した開催の検討が必要であると考えられる。

- (4) 相互のコーディネーターが「山田町版ファイル」を活用することにより、相互のコーディネーターの交流を進めることができた。また、ニーズのある小・中学校では、連携を進めることができた。

以上のことから、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携において、相互のコーディネーターが必要な情報を収めた交流を図るファイルを活用し交流することにより、教育的機能の理解が深まり、小・中学校と盲・聾・養護学校との特別な教育的ニーズに応える連携に役立てることができた。

VII 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校相互のコーディネーターが交流を図るために具体的な内容・方法の手だてを示したファイルを作成し、実践をとおして、小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方を明らかにし、特別支援教育の充実に役立てようとするものである。1年次目は、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本構想を立案し、コーディネーターの交流の現状と連携にかかわるニーズを調査し、交流を図るファイルを構想した。2年次目は、指導実践をとおして交流を図るファイル（試案）の有効性を検討してきた。その結果、成果として得られたことは次のことである。

- (1) 地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方

地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方として、相互のコーディネーターが連携を図るため、「相互を理解する交流」と「連携を進める交流」に視点を当てた「交流を図るファイル」の活用を構想し、研究の基本構想を立案することができた。

- (2) コーディネーターの交流の現状と連携にかかわるニーズの調査

北上教育事務所管内の小・中学校と、県内の盲・聾・養護学校を対象とした調査により、地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の特別な教育的ニーズに応える連携の現状の把握と分析をとおして、コーディネーターの交流の課題を検討することができた。

- (3) 交流を図るファイルの構想

地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携の在り方についての基本的な考え方と、コーディネーターの交流の現状と連携にかかわるニーズの調査結果に基づき、交流を図るファイルの内容と活用方法を検討することができた。

- (4) 交流を図るファイルの活用に基づく指導実践計画の立案

研究の推進構想をまとめ、交流を図るファイル（試案）を作成し、その具体的な活用を検討するとともに、指導実践計画を立案することができた。

- (5) 交流を図るファイルの活用に基づく指導実践

交流を図るファイル（試案）に基づく原案を作成・検討し、第1回合同検討会を開催し、「山田町版ファイル」を活用した研究協力校における実践を行うとともに、第2回合同検討会を開催して実践をとおして「交流を図るファイル（試案）」を再検討することができた。

- (6) 実践結果の分析と考察

事前事後の調査結果から、コーディネーターの意識の変容が確認され、「交流を図るファイル（試案）」がコーディネーターの交流を図る効果が確認できた。

(7) 交流を図るファイルの活用についてのまとめ

地域の小・中学校と盲・聾・養護学校の連携において、相互のコーディネーターが必要な情報を収めた交流を図るファイルを活用し交流することにより、教育的機能の理解が深まり、小・中学校と盲・聾・養護学校との特別な教育的ニーズに応える連携に役立つことが確認できた。

2 今後の課題

本研究の課題は2点である。

(1) 交流を図るファイルの改善

今回取り組んだ指導実践を基に、ファイルをより少ない労力で作成し、更新するシステムについて検討する必要がある。

(2) 「打合せ会」の開催の検討

市町村において、地域のコーディネーターが一堂に会する「打合せ会」の開催について、地域の実情に合わせて検討する必要がある。

<おわりに>

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました研究協力校の先生方に心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- ・岩手県立総合教育センター（2004），『小・中学校の通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童生徒に対する「校内協力に基づく指導」の在り方に関する研究』
- ・神奈川県立第二教育センター（1997），『教育上配慮を要する子どもたちの教育の在り方研究』
- ・神奈川県立総合教育センター（2004），『インクルージョンの展開に向けた支援ネットワークシステムの在り方研究』

